



初年度の昭和56年度は12,500株を県内の繁殖地から移植して3ヶ月後には重量で約250倍に達し、沼から窒素560kg、リン100kgを吸収したことが調査の結果判明したので、2年目の昨年(昭和57年)度は県と関係町村(5市3町)では28,000株を面積で前年の約10倍に当たる5haに21ヶ所(56区画)に移植して3ヶ月後に調査すると重量で400倍と好成績であった。

ところが台風の相つぐ襲来と不順の天候にさまたげられて最終的には計画重量の1/15にとどまったという。

そのうえに野鳥(カイツブリ科のカイツブリ *Podiceps ruficollis boggei* Reichenow とクイナ科のオオバン *Fulica atra atra* Linnaeus) がホテイアオイの若葉を喰うためであることも知られた。

筆者も柏市石鹼利用推進協議会の会長を委嘱されているので委員を連れて手賀沼の観察を行ったが、隣地の我孫子市石鹼利用推進協議会長で手賀沼漁業協同組合長でもある深山正己君(友人の息子)からその状況をきき、特に喰害されたホテイアオイの現場を見て歩いた。

成程浮遊している株は滅茶苦茶に喰われて網に囲われているのは網からくびを伸ばして届く範囲が害を受けていた。

但し調査が不完全で、ホテイアオイを喰害したのがカイツブリとオオバンだけで他の野鳥には関係がないのか、またカイツブリとオオバンは食料とするのみではなく、巢材にも使っているのではないかと疑問が残ったが、本年度に再調査を行うことにしているものの、一応報告しておきたい。

(1983.1.25)

山口県の新産地

南 敦

水草研究会報No.5 (Oct. 1981)「山口県のウキクサ科」において、山口県のヒメウキクサの産地を記しておいた。

1982年(昭和57年)12月26日、山口県吉敷郡秋穂町秋穂西、黒潟南、横浜社〔小郡-2〕の境内にある約3m×6mの池(沼)において、ヒメウキクサが二重三重に重なっているかのごとく密生しているのを見出した。他のウキクサ類が全く混っていない純群落であった。この点、いままでの発見地では、ヒメウキクサが他の多くのウキクサ類にわずかに混生していたのと異なる。このヒメウキクサは、この時期において、まだ寒さの影響を全く受けないかのようによく生育していた。表面は濃緑色だが、葉縁のみは紫色。裏面は紫色。根の数は3本の個体が一番多く、次いで2本の個体、4本の個体と続く。5本の個体は少ない。

秋穂町は山口県の瀬戸内では中央より、やや東よったところである。いままでの産地、即ち、萩市、岩国市、柳井市などはかなりへだたる。ウキクサ類は繁殖力は抜群であるが、害虫の被害をよく受け、コイやフナなどによるこんで食べられる。したがって、コイなどを飼育している池(沼)などにはないわけである。なお、今回採集したヒメウキクサ<35688、35689、35690>は証拠標本として、国立科学博物館、山口県立科学博物館等にそれぞれ1983年1月31日納入した。(注)<>内は筆者の標本番号。

○辻井達一・渡辺祐三編「北海道の湿原」(北海道大学図書刊行会、1982年7月、39頁、1400円)

釧路湿原をはじめ道東のいくつかの湿原をとりあげ、四季の風景や植物、鳥などを紹介した写真集である。「北海道の湿原」というタイトルをもつ以上、もっと多くの湿原を取り上げるべきであろうし、内容的にも、もう少し骨のあるものがほしい。

(角 野)

○陳守鉅、陸月蓮、朱成徳編著、*經濟水生植物* 農業出版社、北京、第1版第1次印刷、1982年、A5版、本文121頁、0.34元(210円)、

本書は経済性のある水生植物を簡単にとりあつかったもので、次の内容がある。

第1節 水生植物概説(分類、特徴、経済価値と生産展望)、第2節 食用経済水生植物の栽培と利用(ヒシ、ハス、クワイ、シログワイ、マコモ、セリ、ヨウサイ、ジュンサイ)、第3節 飼料及び肥料用経済水生植物の栽培と利用(ホテイアオイ、ボタンウキクサ、ツルノゲイトウモドキ、アカウキクサ、ミジンコウキクサ、マコモ? (菱草)、セキショウモ、クロモ、ササバモ、ヒエ?(稗草)、第4節 工業、手工業原料用経済水生植物の栽培と利用(ヨシ、ヒメガマ、サンカクイ(イ?))、第5節 薬用経済水生植物の栽培と利用(オニバス、ヤナギタテ、ショウブ、ウキヤガラ、ホシクサ、サジオモダカ)

(浜田善利)

文献リスト<1982-(2)>

有馬忠雄. 淀川のアシ. 植物と自然 16(6): 31-33.
 大滝末男. 日本学生科学賞中央審査出品中の水草関係の作品と水草教材について. 理科(日本理科教育協会) 13(1): 28-31
 大槻虎男. ハス博士大賀一郎先生. 採集と飼育 44: 534-538
 角野康郎. 六甲山に侵入したコカナダモ. 『六甲の自然』(室井緯・清水美重子編. 神戸新聞出版センター): 154-155
 ———. ヒルムシロ属の実生の葉にみられる気孔について. 植研 57: 332-336
 苅部治紀・永井 晃. オニバスに出会う. 植物と自然 16(2): 28
 神田房行. 釧路湿原の塘路湖におけるトロマリモの分布. 植研 57: 248-253.
 小宮定志. 食虫植物とその最新情報. 植物と自然 16(12): 19-23.
 須藤孝久・菊地卓弥. 八郎瀧干拓地における植物相と雑草の変遷. 雑草研究 27: 112-120.
 [水路、湿地の水草にもふれている]
 百瀬忠征. 写真にみる実験観察材料としてのオオカナダモ(10) — 核と細胞質との関係 — 遺伝 36(6): 口絵(3頁)
 矢部和夫・伊藤浩司. ウトナイト沼湿原の植物生態学的研究 — 植物群落の数量的解析 — 環境科学(北海道大学) 5: 107-129.

山崎史織. 河原水辺植生の帯状分布. 植物と自然 16(6): 14-19

Ahmed, S.A., M. Ito & K. Ueki. Phytotoxic effect of waterhyacinth water extract and decayed residue. Weed Res. Japan 27: 177-183.
 Ishikura, N. 3-Desoxyanthocyanin and other phenolics in the water fern Azolla. Bot. Mag. Tokyo 95: 303-308.
 Kamio, A. Studies on the drying of marshy and heavy clay soils ground by means of vegetations - On the process of polder land drainage and structural changes of Phragmites communis community in the Hachirogata Central Polder. Jap. J. Ecol. 32: 357-364.
 Kanai, H. Pool catalog and aquatic plant distribution in the Ozegahara Moor. Ozegahara: scientific researches of the highmoor in Central Japan: 47-73.
 Kato, A. Kinetic studies of growth and flowering of Lemna gibba G3 under continuous light: effects of night interruption with red and far-red light. Plant Science Letters 27: 203-212.
 Kishimoto, U., N. Kami-ike, Y. Takeuchi & T. Ohkawa. An improved method for determining the ionic conductance and capacitance of the membrane of Chara corallina. Plant & Cell Physiol. 23: 1041-1054.
 Kondo, T. Uptake and leakage of some ions in relation to potassium uptake rhythm in Lemna gibba G3. Plant & Cell Physiol. 23: 901-908.
 ———. Correlation between potassium uptake rhythm and nitrate uptake rhy-